



特別  
子12  
3643  
204



古  
夏  
校  
出  
集

一万歳之文

武逸咄抜書



徳大寺内大臣俊元朝臣三河守之任... 萬年之壽と喜きかせ... 万歳と申すて八人の心ふり... 万歳を教へて... 内務省吉野吉史と云ふ... 天子將軍北河臺所... 萬年中と云ふ... 右大臣吉公... 水お語



梅若誠太郎氏 昭和四年十月廿日 梅若重戸氏 寄贈

二 辭物語

義經公軍勢

以しはる二重恩只尔大乃荒馬争て統たての人

秀吉公の他小加減関白園と名付て某法を書かしあるに

- 一 西遊 二 毒 一 堪忍 二 思案 三 一 分別 二 毒
- 一 用捨 毒 右每朝一復宛てり申子孫延壽丹也

禁物

無理

急命

過言

可心

油引

右名目二二度宛てり申し下り申し

一 慾を離よ

一 大酒を飲

一 不可飲

一 女を不之免

一 無名人を不之

一 物を不之退屈

一 深きを不之

一 我行末を思

一 物を不之

一 一人を不之

一 我分を不之

一 人を不之

一 樂を幸方如程思入

一 幸方を楽の程思入

一 一人の無理を物と思入

一 五人の被官を慈悲をせよ

一人義理を思入善心二を為地思

右十七ヶ條疏一致之

武家新法度支

一文武忠孝を励む一正禮義事

一系勅交智之儀毎歲一書訓定之時最長者負教不之及

勤多事

一人馬之具等分派に急む一相傳事

一新規之城郭梅管堅禁止之居城之隈田畠石壁等敗壞

之時之違奉約訓之儀是也梅屏門以下之如左規之儀

補事

一企新規結託黨成約并私之関所新法之津留制禁

事

一江戸其何國之にも不意之儀之とも根に不無集

在國之輩之と新法をとり知ると相傳也何而之雜約

刑罰及者之外不可書白之記渡使之方右事

一喧嘩口論之加弾怙私之津論制禁之若無控子細有之ハ

違奉約前之儀其方不依何事令河邊之其社中今あり

たもく之ハ一其申之儀之とも不之相拘事

附記之々輩百姓御論者之文記之令強合一海之有序

儀之評定前之儀也一之儀制事

一國至城至之方之以上近習其諸奉約物以私而之結城礼

公家与新結縁迄之違奉約前之儀是事

一音信賜言塚墓之規或或瘞瘞或家言作其外万夏  
之用綬納也言之其言之送貝也好之不以波水之六者事

一衣裳之亦不以混亂白綾之以上白小袖諸大夫以上免件  
之事

附流若黨之乃衣裳之羽二重納細布本綿弓銃炮之  
者之細布本綿之以下之六乃布本綿一用事

一宗輿志一門之歷之國之職之志乃乃之以上乃乃之息  
城之及侍從以上之嫡子或年乃乃之許之儒醫祿也  
家之制外事

一養子之同姓相應之者之撰之若乃之以上乃乃之六由備之

一於4之乃之政之以上乃乃之十七歲以下之章及未乃  
雜波者子時味之以上之能流實子筋目遠之乃依之  
之事

附細乃之依乃之制禁事

一知乃之刑制法原之乃乃之國乃乃之令表弊送諸驛與  
檣舟等之乃之絶之令能送事

附高船外大船之如克規停止之事

一諸國教之寺社之乃乃之古之小乃乃之附事之乃乃之乃  
論新也之寺社建立之乃乃之令備之乃乃之若乃之控之乃乃之有之六達事  
之乃乃之乃乃之事

一萬年應以戸之法度於西之所之三年

右之條之皇之相守者也

天明七年九月五日

通用錢始之古又

天乎寶字二年秋八月孝謙天皇位ヲ大子御讓  
了年寶字四年春二月詔有テ曰ク國ニ益有テ即ワテ  
鑄錢ノ司ニ仰セテ是ヲ鑄サシム其  
新銅錢ノ文曰萬年通寶此一錢ハ舊銅錢ノ十錢ニ當ル

又銀錢ノ文曰太平元寶此一錢新銅錢之十錢ニ當ル  
又金錢ノ文曰開基勝寶此一錢銀錢ノ十錢ニ當ル  
日本ニテ錢ヲ鑄始レシハ人皇四十一代持統天皇八年之春三月  
二日ニ始テ鑄錢之司ヲ立シト也

三種の神寶其又

抑和漢ノ古今不易の古字ハ先日本の古字と三種ノ  
神寶といふハ三種ハ神璽寶釵内侍所ノ神璽ハ神乃下  
と云テ理ハ正也ハ宝釵ハ村雨の釵と云テ理ハ慈悲ハ内侍所  
鏡と云テ理ハ知也ハ此三種ノ神佐ハ萬古又の根元ハ以テ  
と知也ト云ハ此三種の古字といふハ慈悲と萬古根

元と云ふは、（？）のよきを知りて、（？）の誠のふかき慈悲なるを、（？）  
御家と云ふは、（？）の慈悲より出づる知恵が誠のちかき  
慈悲の知恵の邪知く漢あるは、（？）の知仁勇の三徳と  
いふ位に、（？）の神説の我に神性を、（？）の慈悲を以て  
神性とて我に神力を、（？）の我に神性を以て我に神通を  
知恵を以て神通とて我に奇持なり、（？）の慈悲を以て奇持  
といふ我に方便なり、（？）の慈悲を以て方便とてこれある  
こと、（？）の慈悲道なるは、（？）のありしこと

白雲の琵琶之史

撞村肖撞寺守カ、紫田家、名ある家、（？）の勝家滅亡の後、（？）

よきと懇め招くこと、（？）の敢う仕て、前田利家、（？）  
とて好んで弾き、（？）の聞白雲と云名する、（？）の琵琶を  
贈り、（？）の勝家、（？）の勝家、（？）の勝家の戦に、（？）  
成政と、（？）の勝家、（？）の勝家の戦に、（？）  
浅野家、（？）の勝家、（？）の勝家の戦に、（？）

光明皇后之史

光明皇后、（？）の御女、（？）の御女、（？）の御女、（？）  
御母、（？）の御母、（？）の御母、（？）の御母、（？）

光明皇后、（？）の御女、（？）の御女、（？）の御女、（？）  
大寺を建てる、（？）の天下、（？）の天下、（？）の天下、（？）



興へ業を施す心よ白くらく功德已叶へるとほつを慢する  
意をけらる有る夕々室中より功小訛まあのれ其功德  
莫大なると言へりつとをくとすくつるも皇后を告ふ  
但る温湯を浴宮と建ふ遺殿と母に熟く入湯せ  
む時小皇明哲預と起し我浴室入る親ら千人を坂を  
去る處と河とをり熟御諫え止む用じまのまより  
日後沐浴する人々坂を自らかきあふ已に九百九十九  
後一人の痲病人ありまきまぬり浴せそまぬら  
まきまぬ又臭氣中と也けき難し皇后少く憚るとも  
有る御思ふとまらけり我預望し所今一人も千人満  
る如きと何とまらけりやまぬら病ん背と指麻布

了垢とまきまぬ時小痲病人后の向ふ我病年々く前  
良醫を教へて曰くこの瘡の膿と吸つてくえと今  
愈るともとゆくとくぬとて我病を治く悲む者なり  
故にけりまらけり若くやうなる今所皇后功德とら  
みく月遣るの御身あまの慈なまの仰き預らるる  
皇后をあらまると申せし白皇后始とて思ひて地預  
れ成就せしとて思ひ止まるとゆくとて痲病人の膿を  
吮了後痲病人曰はてまのまの病年々く病ち愈む  
と熟くゆし白皇后痲病人相平小人の語らふと御思  
言有る痲人大光明と放ち忽怒とて消失ぬ我預を  
成就せしとてまきまぬ天皇と皇へも御物語有り喜地小寺

を建て阿闍寺と号けるを後天乎寶字四年六月  
御歳六十を崩し五十

### 中將姫

大織冠錦足公之孫從一位右大臣豐成卿聖武孝謙稱  
徳之三朝ニ事工朝ニ徳名人也天寶神護元年十月壽六十歳  
ニ卒ス 此人子なきこと愁くま婦相伴長谷を詣て  
一七日通夜して祈らんとある信女の感泣うまう北の方  
懐胎ありて一女をゆくそ姫と名と申す中將姫と申す

### 太平版敷

天地の誡北道は明けけく月日の巡り遠く去  
い花咲き秋實り風を治る天子号八雲に去る第に  
甲冑と云ふものも血丹の人形不了なり屎凡種や  
燭双紙小夜や日本の軍おし能や謡や甚希との見  
たり夢さう耐も今太平の山麓や甚希も荒城  
の波間に遊ぶ朝顔雨音の鳥や鴨や雛子煮たり  
焼たり焼く食に不足云う好く見何れと尋  
はは世の字も依も知ぬ心と云ふ心と云ふ

乞食北人の身北上のりこにかりに心憐れ有はらるる  
只るる城志すぬう上の恋り事すししがやあつ砂糶  
餅何んまなく檄煙たり誠軍の切合城見ふ心の志  
あつても嗚呼句伴あや怖しや首玄く大合戦夜に  
矢叫む彼所の石火矢貝袴を鼓録波の夢或は家居も  
おあはたは所も在家も焼野とあり子の身引く  
逝るも何り妻もまも引られ枕並んあつて中に  
腹小子銭持く心河波時矢知ぬ身の何くいふ野  
末まそいつ身二つに制るもゆそ雨の降ふ日も風も

夜も松の下やし草枕老も若も枕ただし草鞋を足  
賣家となく衣ふても心もぶつても極り飯をツ愛と  
くも賣人なく息もまうく足心らうく逝行くうちに  
流の矢みく何となく命果と何り切るとやう実と  
為すゆくに夢も怖しや叔源平の大軍むと多戦の坂  
崩し八幡の浦北取軍切りつ切るといつ彼軍の道と  
是雲の上人の荒心風も当ぬ身を并死も負生捕  
ふれ或は婚若居方花の夢も波の底鯨志やちあみの  
餅食とちると衣中云とお訴うられ割屋んゆと糸

上くも憂き目付くよ目数知れは方くの身の上  
の形多難儀に比ては人の数も入難く蛇や蠅も  
芥不芥のい少難儀を成ることも不徳不徳に思はれ  
増て拙む我くハ其程も亦た一ツ不仕合心  
叶ぬ事ある世の災難を我獨り受たる根に思ハ  
ましく浮世をわらわ恨み成りて神や仏に慈言  
むせうに苦むむのぞがし吉凶禍福のわざを  
の如しと夢ぞがし恨み跡ハ怨むり仕合はるハ不  
仕合はるこそこのハ死る。若梅も様も教れハて又

暖く春も有るし皆是天の誠此乃夜ハ何のいふ夜の  
道冬ハやむいふ冬の道人ハ人の誠の道は誠にま  
遠祿ハ子孫長久家繁昌又世誠に有るや吾天下  
國家大強き丈に今日我く是雨も思ふは雨  
交れ一日喰まに居るもあく一夜程ハ暮るも  
あふハいふある果報ぞや世の爲たあるものハ  
又がらもしたるた免しある我のこあるは親や  
子や夫婦兄弟中一ツ家に飢死を食ふ者あるハ先  
祖父母の由意みすこそ上に難者中も恐れ多かれと

首上く横方が程冒や方力の法命かけの山首で  
今世如く右樂士農作れ田知有米麦粟稗何  
あり心何きに仰りお山行野歩行しこころ色  
指をき本さしたるあり何道の果へけいりともさ  
が量程せむ量程成云ぬコラシ一擧ぶ者なく腹が腹  
川たぐ一擧飯日か著たぐはたぐさや泊川くおそ  
橋がそれハ船後しる成居候うう駕籠やあり其  
酒酌酒塩梅よし何んやうお馳をさるる成居料理の  
喰さし頭痛腹痛瀧つ久一節季に胸成痛免たり

お目心心の馳ぶのも皆成馳をの喰さしあんが  
お馳をの喰さしあんがお馳を成さるる成居が腹  
かぬハ喰さし飲下悪いお飲ぬうよし一立て悪いハ  
おぬがくし一立て悪いおぬがくし一立て悪いハ  
せぬがくし一立てお後々塩梅くし一親子のお  
塩梅くし一夫婦兄弟中塩梅くし一橋とも覚ても  
塩梅よし一実母太平の難者や

著るハ天地清代の世めくみ

父母や重人の思成味く

書之十體之古史

一古文字

黃帝之史  
倉頡作之

一大篆字

國史  
作之

一小篆字

秦之相張  
李斯作之

一八分字

秦之上國文  
王次仲作之

一章草

漢之史  
游作之

一行書

後漢之劉德昇  
作之

一草書

後漢之張伯英  
作之

一籀文字

史籀作之  
古文字トウニ吳人

一隸書

秦之丁邛之人  
程邈作之

一飛白

後漢之左中郎  
蔡邕作之



まゝと大層筆の冠つて

### 本朝能書之二筆

崇徳天皇人皇五十二代内名ハ神野親王桓成天皇  
二皇太子常不經僧を好む給ひて文章ハ玉子の如く  
新虎と云ふ一筆弘仁九年四月殿閣諸門の額を書改め  
らる北門より東門の筆東をりてハ橋のまやなり  
南ありて筆ハ意天門ハ空海も書く一筆弘治の書も  
けり代ハ初也

橋逸勢ハ尚書中大夫入居のみく其乃名を其書もかき

のせうをいふの巻に〜〜後孫天皇延暦の書と  
ありて其門の額を書く一筆桓成天皇延暦の書と  
遺唐使より好む筆一書して唐書いふを其書と  
て弘治の書一筆空海と云ふハ海鏡の書一筆人の  
筆をいふて橋秀才と云ふも其書と也

空海ハその名のよき人其書のよき人切きよき書人  
一筆弘治の出家一筆弘治の書一書して唐書いふを  
其書と云ふハその書一書して唐書いふを其書と云ふ  
書一書して唐書いふを其書と云ふ一書して唐書い  
ふを其書と云ふ弘治九年に勅をいふて意天門の額を書



其一惠りけるに空海筆を授て是をもちて孫の姪を  
頼みされし事と其和ふべき事多し一永和二年三月五日  
入宣有弘法大師と謚す

中朝能書之三跡

道風朝臣は少野の岑ミモの孫おの尊法の子延長寺  
に延長帝及風を乞へて風けつのはん志の志やこれ  
姓名を乞へて免給ふ事書妙なるに名を乞ふかせむ村上天  
皇康保二年に卒して年七十一官位は通儀右大臣トウギ持世大  
やに至る事和一生書藝ふくむことめあけ  
かそく

冬儀佐理はら友り氏あり潜カク情公の孫あつやの  
子母は時平のおとこの娘くまの孫段多んゆ段の朝ふ  
はくして大宰府のが成りりわたり書妙を授てま  
れあはし後世に書妙を乞へて佐藤といふ貞元年  
中に朝内書どしるありて其門の額を佐理とてに  
おろせり書し免給ふ事と其和むべき事多し  
名らりりし事と其和むべき事多しにのせりしり  
成カク成セリは徳公の孫あり其京の長者の子官三位  
大宰朝臣のその書大綱に正一兼院の朝ふあはし道  
風朝臣佐理と書妙を乞へし事と其和むべき事多し



已くさると管仲の曰を了るはありてをぬきたるものごと  
すまらざるをせざるを重んず申に放ちてそゆふてつらひ  
ききつらむよ行るよ出するもく 前に

夕されはるも及ぬとぬらほら

わとさ——るる——まうせうそゆ

何のいともゆとよとあるは宋の法懐灌う書断め云晋帝  
が時小郊を多るとはなり更祝の板をユ人につせらるるに  
筆跡本よ入と三分と人見王義之うきするなりは義之を  
筆のその好術を得てつらむひのつらむとかめゆとく  
よつて筆法を乃まるといふなり

夫婦のむつま——さじ二ふを替替較の篇のをよ女はつと  
うにをたふ死えと也女の及一ひ又よつてつらむ  
他人よまらゆる理あり——也是を考成借めとやう  
同定は月——待絶の才車好篇の心せらるる室を是  
さとも死——ては定をゆ——せんと也定はつら定の  
なを始免の詩は貞女の道ありこれハ淫奔の待ち  
んた久し

姉妹七去之文

倭小學子出

書をさるれ七つありあはこ一つありとあつとあふふ者なる書  
二つありあはこ書二つあり淫乱しつらむる書四つありんは

き書 上りありあし 此病ひ何の書 上りあり口きく なる書 七の  
ぬらみひる書 此書ありあきとあし 病ひなる二の  
天命ありハ 極みありし 何なる書 也もあ類 書し  
先儒 評判もあし

忠臣二君 小治久の書

倭小治久

舟の王 燭が語 忠臣ハ 舟の君 小治久 也 此 烈女 なる  
人の おつと 事あり びと して 此 故 なる 也 燕 の 舟  
樂教 と 云 舟の 事 也 舟 王 燭 が 受 たる 書 也  
乃 此 舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣  
ある 畫 也 といふ 所 の あり 二十 里 なる 舟 也 といふ 也

色 せむ 書 也 舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣  
中 治 久 なる 舟 王 燭 なる 舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣  
扱 と して 舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣  
中 治 久 なる 舟 王 燭 が 返 答 せ 終 へ 舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣  
舟 の 書 也 といふ 所 の あり 二十 里 なる 舟 也 といふ 也

上 官 之 書

長下ハ 舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣  
且 口 け あり 舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣  
告 する 舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣  
舟 中 へ 味 方 と 思 ひ ぬ 思 ひ ぬ 舟 が 隠 遁 して 臣

あきなるそとくあららるるゝあぬゆゑ

あつ海のとりまのりかゝるゝあつ可

太公望が語ふ天下の目とつて凡天下の耳とつてきこて  
下は人をひて思ひゆれとつて命の長短身の苦楽ふか  
たをさるも命をぬむりのハ昔友と命を可き物なれはあつ  
をたし人をあつふ持ともハ命安あく天下の家と治る  
るまゝかゝるゝ

人々きく人の中あはせゆとてあき

人々のあきこひと人々あせむや

又おと海へいゝ代まよとつて下謀ひて昔西都のこゝら  
乱るゝとつて

玄徳政変之事

蜀の玄徳禁酒の法をおしけるそ市市中に酒を賣ると高  
考を玄徳が野の酒をたはるる自屋と市捕已給交路々所  
古の酒を賣ると高をたはると中流路をたはる玄徳のせとた  
たけつ酒を中とつてとも引給へ己に酒を賣る罪をたはて死罪  
極元時の笈瘡とつてさう酒をたはると玄徳の心供して身  
市中の酒を賣ると高をたはると笈瘡をたはると只今あれ  
之を連通する人正しくさあ考あおさるゝとる酒をたはる  
市捕已給とつてあはれハ玄徳がさうとせはさうさあ酒を  
とつてたはると作あはれハ玄徳がたはるとさあ酒をたはると  
通るゝとつてさあ考とる酒をたはるとつてハ玄徳がたはると  
率ふと

第<sup>二</sup>種 男女連立通<sup>二</sup>とハ<sup>一</sup>して夫婦兄弟<sup>二</sup>と<sup>一</sup>志<sup>二</sup>と<sup>一</sup>何<sup>二</sup>と<sup>一</sup>以て<sup>二</sup>  
不<sup>二</sup>多<sup>一</sup>とい<sup>二</sup>ん<sup>一</sup>志<sup>二</sup>と<sup>一</sup>樓<sup>二</sup>と<sup>一</sup>一<sup>二</sup>や<sup>一</sup>と<sup>二</sup>加<sup>一</sup>る<sup>二</sup>志<sup>一</sup>を<sup>二</sup>不<sup>一</sup>捕<sup>二</sup>六<sup>一</sup>玉<sup>二</sup>中<sup>一</sup>に  
く<sup>二</sup>稱<sup>一</sup>ハ<sup>二</sup>五<sup>一</sup>ま<sup>二</sup>し<sup>一</sup>との<sup>二</sup>ま<sup>一</sup>い<sup>二</sup>る<sup>一</sup>時<sup>二</sup>ふ<sup>一</sup>及<sup>二</sup>種<sup>一</sup>何<sup>二</sup>を<sup>一</sup>め<sup>二</sup>ん<sup>一</sup>志<sup>二</sup>と<sup>一</sup>  
何<sup>二</sup>く<sup>一</sup>う<sup>二</sup>れ<sup>一</sup>ハ<sup>二</sup>ふ<sup>一</sup>多<sup>二</sup>も<sup>一</sup>も<sup>二</sup>お<sup>一</sup>成<sup>二</sup>る<sup>一</sup>を<sup>二</sup>持<sup>一</sup>居<sup>二</sup>け<sup>一</sup>し<sup>二</sup>て<sup>一</sup>い<sup>二</sup>は<sup>一</sup>る<sup>二</sup>  
今<sup>二</sup>中<sup>一</sup>と<sup>二</sup>る<sup>一</sup>志<sup>二</sup>と<sup>一</sup>樓<sup>二</sup>と<sup>一</sup>一<sup>二</sup>方<sup>一</sup>し<sup>二</sup>中<sup>一</sup>分<sup>二</sup>皆<sup>一</sup>悲<sup>二</sup>入<sup>一</sup>男女<sup>二</sup>と<sup>一</sup>し<sup>二</sup>上<sup>一</sup>解<sup>二</sup>傳<sup>一</sup>  
男<sup>二</sup>陽<sup>一</sup>女<sup>二</sup>陰<sup>一</sup>持<sup>二</sup>け<sup>一</sup>る<sup>二</sup>者<sup>一</sup>ハ<sup>二</sup>夫<sup>一</sup>を<sup>二</sup>ふ<sup>一</sup>多<sup>二</sup>と<sup>一</sup>して<sup>二</sup>獄<sup>一</sup>中<sup>二</sup>小<sup>一</sup>押<sup>二</sup>は<sup>一</sup>る<sup>二</sup>  
而<sup>二</sup>政<sup>一</sup>と<sup>二</sup>成<sup>一</sup>て<sup>二</sup>乱<sup>一</sup>玉<sup>二</sup>と<sup>一</sup>ある<sup>二</sup>と<sup>一</sup>宜<sup>二</sup>い<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>る<sup>一</sup>及<sup>二</sup>種<sup>一</sup>何<sup>二</sup>つ<sup>一</sup>こと<sup>二</sup>亦<sup>一</sup>及<sup>二</sup>い<sup>一</sup>る<sup>二</sup>  
仁<sup>二</sup>政<sup>一</sup>要<sup>二</sup>政<sup>一</sup>と<sup>二</sup>中<sup>一</sup>通<sup>二</sup>理<sup>一</sup>と<sup>二</sup>以<sup>一</sup>て<sup>二</sup>毎<sup>一</sup>事<sup>二</sup>と<sup>一</sup>なる<sup>二</sup>と<sup>一</sup>い<sup>二</sup>は<sup>一</sup>る<sup>二</sup>及<sup>一</sup>種<sup>二</sup>人<sup>一</sup>と<sup>二</sup>成<sup>一</sup>る<sup>二</sup>  
市<sup>二</sup>中<sup>一</sup>お<sup>二</sup>る<sup>一</sup>男<sup>二</sup>や<sup>一</sup>制<sup>二</sup>禁<sup>一</sup>の<sup>二</sup>酒<sup>一</sup>を<sup>二</sup>飲<sup>一</sup>む<sup>二</sup>と<sup>一</sup>い<sup>二</sup>は<sup>一</sup>る<sup>二</sup>及<sup>一</sup>種<sup>二</sup>人<sup>一</sup>と<sup>二</sup>成<sup>一</sup>る<sup>二</sup>  
い<sup>二</sup>ま<sup>一</sup>め<sup>二</sup>を<sup>一</sup>し<sup>二</sup>今<sup>一</sup>市<sup>二</sup>中<sup>一</sup>住<sup>二</sup>居<sup>一</sup>る<sup>二</sup>男<sup>一</sup>女<sup>二</sup>も<sup>一</sup>先<sup>二</sup>其<sup>一</sup>如<sup>二</sup>く<sup>一</sup>千<sup>二</sup>智<sup>一</sup>ふ<sup>二</sup>落<sup>一</sup>る<sup>二</sup>  
似<sup>二</sup>し<sup>一</sup>る<sup>二</sup>に<sup>一</sup>自<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>中<sup>二</sup>及<sup>一</sup>と<sup>二</sup>流<sup>一</sup>る<sup>二</sup>を<sup>二</sup>志<sup>一</sup>樓<sup>二</sup>と<sup>一</sup>して<sup>二</sup>我<sup>一</sup>ち<sup>二</sup>不<sup>一</sup>得<sup>二</sup>と<sup>一</sup>

早<sup>二</sup>く<sup>一</sup>及<sup>二</sup>種<sup>一</sup>と<sup>二</sup>許<sup>一</sup>し<sup>二</sup>て<sup>一</sup>い<sup>二</sup>は<sup>一</sup>る<sup>二</sup>及<sup>一</sup>種<sup>二</sup>人<sup>一</sup>と<sup>二</sup>成<sup>一</sup>る<sup>二</sup>  
及<sup>二</sup>種<sup>一</sup>と<sup>二</sup>許<sup>一</sup>し<sup>二</sup>て<sup>一</sup>い<sup>二</sup>は<sup>一</sup>る<sup>二</sup>及<sup>一</sup>種<sup>二</sup>人<sup>一</sup>と<sup>二</sup>成<sup>一</sup>る<sup>二</sup>



